

バルザック『絶対の探求』の起源をめぐって（三）

——ウロンスキのもたらしたもの——

西 節 夫

三 バルダンスペルジエ説のこと

アダム・ド・ヴィエジュホヴニヤは「ただ一つの力によって変形させられている、万有に共通なある物質」⁽¹⁾である「絶対」の存在を予想し、バルタザル・クラースはこの絶対原素が自らの手で発見されることを信じて、一連の化学実験に没頭する。彼らの化学的「絶対」説がウロンスキに負うているのは、先に確認したように「絶対」の語だけなのか、それとも、後者の影響は一語にとどまらないのであろうか？

この点について、トゥーヴナンの主張は、バルザックはウロンスキの思想に固有の「絶対」の語を借りたが、意味するところをまったく変えてしまったというのであった。またその理由について、彼が、ウロンスキの神秘主義的精神の觀念とか靈魂の本性に関する仮説にもまして小説の題材として不向きなものはない。それゆえ、バルザックは「絶対」の問題を物理・化学といった実験科学の領域に移しかえ、主人公の研究を物質にかかわるものにするることによって、家庭の経済的破滅という悲劇の原因をはっきり説明できるとしたのだ、——と解釈していることもすでに見た通りである。⁽³⁾要するにトゥーヴナンによれば、バルザッ

クの「絶対」はウロンスキのそれと完全に異義のものである。前者の「絶対」の理論と後者の「絶対の哲学」とは比較検討するに値しないのであった。

ところがバルダンスペルジュは、彼の画期的な労作である『バルザックにおける異国的指向』(一九二七。紹介するまでもなく、バルザック研究に比較文学の道を拓いた)の一章を割いて、バルザックの世界にウロンスキの生涯と思想の反映乃至は影響を探りながら、右のようなトゥーヴナン解釈に言及して、「しかしながらこのポーランド人数学者は、化学としても、彼を駆り立てていたすさまじい好奇心の外に置きはしなかった」と批判している。そして、さらに次のように述べるのである。「それに、彼のような精神にとつて、科学を区分するなどそれ自体として無意味なことである。この燃えたぎる頭脳が認めていたような絶対は、きわめて中心的な観念であつて、いかなる学問も深くかつ私心なく行なえば、当然その探求に帰着するのであった。」⁽⁵⁾

バルダンスペルジュ教授の示唆に従えば、バルザックは「絶対」の語ばかりでなく、化学的「絶対」の推論までもウロンスキから借りたことになるであらう。が、バルデーシュはこれに対して、次のようにきわめて手厳しい反論を

呈している。引用文の初めにある「これらの説」とは、「バルザックがバルタザル・クラスに与えている物質の単一性に関する理論」のことである。

「比較文学で己れの知的な店を開いたある大学教授が、二〇年ほど前に、バルザックはこれらの説を国際的な社会でかなり広く知られていた変り者のあの数学者ウロンスキから借りたのであると主張した。講壇批評家のこの示唆は、彼のけちな商売にはきわめて役立った。しかし、バルザックの小説の意味をとき明かすにはきわめて役立たずであつた。この仮説を言い出したかの学識ある教授、ならびに彼に従つてこの説を世に広めた人々は、ちよつと注意してバルザックを読んだ方がよかつたのである。そうすれば、アダム・ド・ヴィエジュホヴニヤのバルタザル・クラスに詳述する理論が、追つてバルザックが『セラフィタ』(Seraphita)で述べることになる、しかも彼の「哲学的研究」すべての根源にある理論と大きな類似を示していたことを発見したのであらう。この地味な説明は、数学者ウロンスキの著作との照合よりも明らかにばつとはしない。だがとにかく、どんなバルザックの読者にもたちどころに確かめてもらえるという強味がある。こうしてクラスの説

は、バルザックが『あら皮』及び『知られざる殉教者たち』で思考の性質と影響について書いていることをここでも取り上げているにすぎないこと、またそれは、バルザックがジョフロワ・サン＝チレルから借りたと言明し、十八世紀にあつてはシャルル・ボネ、ディドロ、その他若干の者によつて述べられた組成の単一性と万有の階層の理論に、等しく関係のあることが容易に理解されるであらう。

「……」バルザックは友人の二人の化学者にいくつか詳細な教示を求めた。バルタザル・クラースが行なう研究について叙述するのに、彼はそれを必要としたのであつた。しかし、クラースの理論を考え出すのにはいかなる助けも必要とはしなかつた。この理論は彼のものに他ならないからである。実際のところ、『絶対の探求』にもまして彼にとつて容易な作品はなかつたし、彼の思想の中軸にびつたり位するものはないのである。」

バルデーシュの議論にはいくらか粗さがあるにしても、彼が強調するように、クラースの理論が作者自身のものとして重要な意義をもっていること、クラースとヴィエジュホヴニヤという二人の作中人物によつて展開される「絶対」説が、万有は一にして多様という、バルザック哲学の

根底をなしている認識のいわば化学的表現に他ならないことは、確かにどんな読者にも認めてもらえるであらう。したがつて問われるのは、いうまでもなく、バルザックがどのようにして彼自身の化学的「絶対説」を形成するにいたつたか？——であるが、この課題にはすでにファルジョ女史が十分すぎるほど「実証的」方法で取り組んでいる。そして女史の研究によつても、バルダンスペルジェが示唆したようなウロンスキの影響は否定されている。ファルジョは両「絶対」の理論を比較検討した挙句、次のように述べている。「これらの理論〔ウロンスキの「絶対」の諸理論〕すべてが示しているド・ヴィエジュホヴニヤ氏のそれとながりの無さは、たとえ万一の置き換えの可能性に頼ったところで強調する必要があるうか。バルザックの人物は探求者だが、ウロンスキの場合は啓示の領域内である。」

実際、このあまりに影響の大きかつた碩学の研究には、すくなくとも『絶対の探求』に関する限り、かなり問題があるのではないか。バルダンスペルジェの論には次のような筋立てが認められる。まず、ウロンスキについて反神秘主義の科学者としての面を重視する。次に、バルザックは『絶対の探求』の着想時は無論、きわめて早い時期からウ

ロンスキと面識があったと推測する。最後に、しかもバルザックがそのウロンスキと『絶対の探求』の執筆途中であらためて会ったことによって、神秘主義的「絶対」の探求が化学的なそれに変ったのであらう、と考えるのである。以下、この三点について、バルダンスペルジェの所説を中心に検討してみたい。

ウロンスキとの出会いをめぐって

バルザックは一八三四年八月一日付ハンスカ夫人宛の手紙で、ウロンスキと近々会う予定であることを伝えた。バルダンスペルジェはそのくだりを掲げながら、次のように述べている。「一八一〇年来パリに住み、そこでしばしば世間の耳目を引いていた」ウロンスキに、バルザックがこのとき初めて会おうとしていたとは「ありそうもないこと」で、バルザックの作家修業時代に「両者のあいだに幾度かちよつとした出会いがあったと考えて、まず間違いない」と。「したがって」、彼によれば、「一八二七年十二月のカフェ・ヴォルテールに設定されている『知られざる殉教者たち』の会談にあるのは、おそらく真実の再構成 *reconstruction* に他ならず」、グロドニンスキなる

人物は明らかにウロンスキなのである。⁽⁸⁾バルダンスペルジェはまた、一八三一年に発表された『あら皮』にまで遡って、そこに登場している物理学者フランシェットにもウロンスキを認めている。⁽⁹⁾もっとも、『絶対の探求』に限って言えば、トゥーヴナンの「三つの借りもの」説の他の二点、すなわちヴィエジュホヴニヤの名前でウロンスキが登場していること、及びヴィエジュホヴニヤとクラースとの知的な支配関係も現実のウロンスキとアルソンとの関係を理想化したものであるという主張について、彼は改めて論証を試みているわけではない。とはいえ、バルダンスペルジェの指摘は、こうして作者をウロンスキと格段に密なつながりのなかに置くことによって、トゥーヴナン説を拡大・深化させて定説化したといえよう。

しかし、ウロンスキとの出会いがバルザックの作家修業時代に遡るといふ推測は、彼がハンスカ夫人に対してウロンスキとの会見予定を語っている文章といかにも矛盾してはいまいか。問題のくだりについては、バルザックのウロンスキに対する関心の強さと、それがポーランドからの亡命者という後者の境涯に結びついていることを示すものとして、すでにあらかた訳出して紹介したが、⁽¹⁰⁾ここで原文を

記すと次の通りである。

……《Je dois voir ces jours-ci, un illustre polonais Wronsky, grand mathématicien, grand mystique, grand mécanicien, mais dont la conduite a des irrégularités que les gens de justice nomment des friponneries et qui vues de près sont les effets d'une misère épouvantable, et d'un génie si supérieur qu'on ne saurait lui en vouloir. C'est, dit-on, la plus forte tête de l'Europe》。⁽¹²⁾

この手紙を読んで、バルザックがすでに幾度かウロンスキに会っていたと考えられるであろうか？ そこに見られるのは、バルデーシュがいみじくも指摘しているように、「面識のない変り者」に対する性格を否定できない誇張した賛辞と、明らかに伝聞による評価であって、ウロンスキの名前を一躍世間に弘めたアルソン事件に関する一応の見方は述べられていても、彼の思想内容乃至理論についてはなんの意見らしいものも表明されてはいない。要するに、バルザック好みの天才に対する関心と同時に、対象との距離

がはっきり読みとられるくだりであって、バルザックはこのとき初めてウロンスキに会おうとしていたのだ、と判断せざるを得ないのである。先に筆者は、バルザックがヴィエジエホフニヤの風貌、境涯、精神的ならびに知的な個性を描きながら「ウロンスキをはっきり見ていた」というトゥーヴナンの主張を批判したが、確かにバルデーシュが述べている通り、「トゥーヴナン氏は論文執筆時にこれ〔この手紙〕を知らなかったし、バルダンスベルジェ氏はその重要さに気づいていないようである。」⁽¹³⁾

ウロンスキの反神秘主義をめぐって

バルダンスベルジェは、次のようにもつぱらウロンスキの反神秘主義を強調して、彼の論理家乃至科学者としての面に注意を喚起している。すなわち、「ウロンスキは十八世紀フランス哲学、自然宗教ならびに啓示宗教に対して同時に戦いを宣していた。彼が望むのは証明される宗教である。」⁽¹⁴⁾「彼は熱狂的な論理家であって、神秘主義の信仰の実践とか直覚的な信従とか形式に囚われた礼拝は、彼にとって常に賤しむべき罪過であった⁽¹⁵⁾」と。バルザック研究者で特に同じウロンスキ理解を説いているのはアンリ・エヴァ

ンスであろう。次のように述べている。「ウロンスキは生涯を通じて、一方において神秘主義と感情に基づくあらゆる認識形式とを、他方において実験科学と経験を根拠にした一切の確からしさとを、同じ激しさで告発した。彼はこの両極のあいだに、最も徹底したアプリオリスムが支配し、数学的演繹が絶対の問題から自発運動のそれにいたるまできわめて多様な問題に適用される、まったく個性的な世界を作り上げたのである」⁽¹⁷⁾。

ウロンスキの思弁については、彼を同時代の神秘思想の流れのなかで研究したオーギュスト・ヴィヤットも、その特徴は科学的宗教と呼ぶべきものであって、^{サット}科学者の推理の主張に彼の独自性が認められることを指摘している。⁽¹⁸⁾ ウロンスキの科学的推理の主張は、彼が自分の教説に「理性」を意味するヘブライ語によってセヘリヤニスム^{sehélianisme}と名付けたことに端的に示されているが、セヘリヤニスムとは何か？ ウロンスキ自身の定義によると、「絶対」の感情のみに基づいた宗教すなわち啓示宗教にすぎなかった旧来のキリスト教の完成として、今やそれに代わるべき知識に基づいた宗教、すなわち「証明される宗教」la religion prouvéeである。そして彼は次のよう

に述べている。「キリスト教の諸教義、殊にイエスの神性に関するものは、単なる感情の表明として、したがって単なる信念・信仰の対象として今日にいたるまで神秘のままであったが、これらはセヘリヤニスムにおいて科学的解釈を受け、かくして知識の明白な対象となるであろう」⁽¹⁹⁾。

ウロンスキはこのセヘリヤニスムの立場から、バルダン・スベルジェが述べている通り、神秘主義を「まさしく理性の麻痺」であるとして告発している。当然神秘神学諸派との葛藤を避けられず、それはすでに、ウロンスキがマルセーユからパリへ上った翌一八一一年頃から生じていたと思われるが、実はその最も反響を呼んだケースがアルソンとの「絶対の売却をめぐる訴訟事件」に他ならなかった。周知の通り、イリュミニスムと呼ばれる神秘主義が盛んになったのは一七七〇年頃で、それが大革命を経てなお生き残っていたが、その一派であるサン＝マルタンの信徒たちがこの事件に介入したのである。そのいきさつについて、邦語論文ではまだ紹介らしい紹介はなされていないようである。そこで、拙稿の目的からすれば必要以上にわたるかも知れないが、一通り見ておきたい。

アルソン自身の語ったところによると、⁽²¹⁾ ウロンスキに告

訴されてから丁度一年が過ぎ、自信喪失状態にあった一八
一八年一月二十三日、彼は一通の匿名の手紙を受け取っ
ている。その文面は「これだけがあなたを救い得る」とし
て、師をかえること、「もっと清らかで承認された旗の下
に」庇護を求めることを命じたあとで、「私は第一に、き
わめて有徳にして誠実、謙譲にして思慮に富み、あらゆる
点でH.W.とは対照的な人物の旗を指示します。その方
は生前サン・マルタンというお名でした。御著書である
『誤謬と真理』を求めて読みなさい。読み了えてのち、心
のなかで宣誓を行なうのです。それは然るべきところに響
き、あなたは受け入れられて、恐しい影響から守られるで
ありましょう」と述べていた。H.W.とはもちろんヘー
ネ・ウロンスキのことで、爾後アルソンの許には、ウロン
スキを貶めてサン・マルタン派への宗旨変えを迫る手紙と
奇妙な訪問者が相次いだという。それはたとえ、ウロン
スキはわれわれのように「生ける摂理を成すべくこの世に
遣わされた者ではないから、何一つ目ぼしい成果には到ら
ないであろう。」摂理だけが本源の真理を選ばれた者に伝
え得るのであって、「ウロンスキは絶対によって知的革命
を行なう気であるが、それは思い違いであって、われわれ

がそうさせはしない。われわれはこれまでに彼よりも値打
ちのある多くの者の息の根を止めてきた。たとえばヴァイ
スハウプト、彼はすでに驚くべき数の信徒をかかえ、そ
のなかにはドイツの選帝侯たちもいた。ところが一吹きで消
し飛んだのである」——といったたぐいのものであったと
思われる。

アルソンはすっかり混乱して、一時はウロンスキのミス
ティフィカションではないかとも疑ったようである。しか
し今日では、この一連の手紙の筆者は接神論者のジャン・
ジャック・ベルナルである⁽²⁴⁾と推定されている。ベルナ
ルは一八一一年からパリにあってイリュミニスムの組織の
立て直しを指揮していた人物で、一八二一年にキリスト教
道徳協会が設立された際にも、宗派を超えて大同団結をは
かるべきであるという趣旨の檄文をばらまいている⁽²⁵⁾。とも
あれ、彼を首謀者にしたサン・マルタン派のアルソン事件
介入は成功した。事件自体は、先に紹介したように、結局
アルソンがウロンスキの要求通りに金を払ったことで落着
しているが、アルソンのウロンスキに対する抗弁には彼の
の影響が明らかに認められるし、アルソンは二度と旧師の
許へ戻らなかつたからである。加えて、ベルナルがやが

てサン＝マルタン派とスウェーデンボルグ派の融合まで実現させていることを考えれば、「絶対の売却」事件は、いわばイリュミニズムの復興運動に格好のはずみをつける結果に終わったというべきであろう。

あらまし右のようなアルソン事件におけるサン＝マルタン派の動きを、ヴィヤットは「古いイリュミニズムが隠密裡に生き残っていたことを示す最も興味深い一例」と評している。が、一方これに反発して、ウロンスキの神秘主義批判が急速にエスカレートしたことも容易に察せられる。実際、爾後の神秘神学諸派との葛藤で、とりわけサン＝マルタン派がウロンスキの攻撃の的にされたといわれる。それには、彼らのアルソン事件への介入が当然一因としてあるに違いない。ともあれ、上述のいきさつからしても、「彼は生涯を通じて神秘思想家たちの最大の敵でした」という、バルダンスペルジュが紹介しているウロンスキの妻の証言に誇張はないし、切実でさえあろう。

しかし、だからウロンスキ自身の思想が神秘主義と無縁であったわけでは決していない。「ウロンスキと神秘思想家たちとのあいだには、彼が口にしたがるより以上につながりがある。ウロンスキは彼らの著作を読んだ。そしてカバ

ラヤベーメとその弟子たちがフィヒテ、シェリングと同じくらい彼に影響を与えている。彼の教説は接神論に分の良いものである。」⁽³⁰⁾ ヴィヤットはこのように述べて、ウロンスキが、同時代のすべての神秘思想家と同じく千禧年説信者であって、神政政治の到来を唱えていたことを指摘している。⁽³¹⁾ したがって、ウロンスキの科学的推理の主張とその所産であるセハリヤニズムには、旧来の接神論以上にいわば時代的要請に応えた、あるいはそれを先取りした獨自性が認められるにしても、彼もまた当然接神論者に他ならないのである。ウロンスキはファール・ドリヴェをも論難したが、レオン・セリエは次のように見ている。「ウロンスキはファール・ドリヴェにまるで兄弟のように似ている。彼もまた神の弁護人となるべく天命を受けた人間ではないだろうか。彼も革命的イデオロギーに対して同じだけの敵意を示してはいないか。彼は神政政治と統一とを熱望してはいないだろうか。ただ、接神論者たち以上に特に〈科学者として推理しようというのである。〉」

バルダンスペルジュは、ウロンスキ自身の思想の神秘主義的側面乃至は本質を十分に評価していないように思われる。それは肝心のバルザックのウロンスキ理解とも合致し

ないであろう。ハンスカ夫人宛の手紙でウロンスキを「偉

大な神秘思想家」と形容した彼は、さらに『現代史の裏

面』(L'Envers de l'histoire contemporaine, —バルザックが

作品中でウロンスキに言及しているのは、唯一度この小説におい

ただけである)でも、作中人物に「ヘーネ・ウロンスキ、

あの天啓思想⁽³³⁾の数学者⁽³³⁾」と言わせているからである。この

食い違いについてバルダンスベルジェは黙しているが、彼

に代わって——筆者にはそう思われるのであるが——アン

リ・エヴァンスが次のように述べている。「この事実は……

彼がこの人物についてまったく誤った観念を抱いていたこ

とを示すのに十分である。ウロンスキは神秘思想家やイリ

ュミネとは正反対の存在であつた⁽³⁴⁾。」この見解は訂正され

なければなるまい。ウロンスキは確かに神秘主義に対して

戦いを宣していたし、旧来の神秘神学諸派との葛藤に生涯

を費やしたことも事実である。しかし、「神秘思想家やイ

リュミネと正反対の存在」では決してなかった。ペルナ

ルがアルソン事件の成功に勢いを得て、サン＝マルタン派

とスウェーデンボルグ派の融合まで実現させるにいたつた

ことは先に述べたが、この新生イリュミニズムの主張には

ウロンスキの思想まで取り込まれていたといわれるのも、⁽³⁵⁾

その一証左であるように思われる。

変性説をめぐって

バルダンスベルジェは、バルザックが一八三四年八月一日付のハンスカ夫人宛の手紙で予告しているように、『絶対の探求』の執筆半ばでウロンスキと会ったことによつて、作品のテーマが神秘主義から化学へ変わったのではあるまいか、と考えている。というのは、バルダンスベルジェによれば、『絶対の探求』の導入部に見られる、作品の背景となつてゐるフランドルの環境描写とバルタザル・クラース夫妻の紹介ぶり、「このような画家によるカンパスの拵え具合、前以つての絵具の盛り上げようは、とりわけ、一家の主人が突然神秘主義にとりつかれたために生じる悲劇的な不和の研究に役立ち得るものであつた。」ところが、バルタザル・クラースが妻に向かつて「絶対の探求」を告白する場面を境にして、「それ以後は科学——それも、あの深い感銘をあたえる異国人によつて道を踏みはずしたラヴォワジエの弟子のそれであつて、もはやウロンスキが明からさまに憎悪し非難した神秘主義ではない——の驚くべき支配力が、一人の律気なドゥエ人士を偏執にい

たるまで、破滅と悲劇にいたらせるまでとらえて離さないであろう」からである。³⁶⁾

この仮説には、まず次のような単純な疑問を抱かざるを得ないであろう。先にも触れたように、バルザックはハンスカ夫人宛の手紙でウロンスキを「偉大な数学者、偉大な神秘思想家、偉大な力学者」であると述べて、『現代史の裏面』第二話では「天啓思想^{イリュミナチオン}の数学者」と呼んでいる。後者が発表されたのは一八四八年九月だから、おそらくこれらのレッテルは、バルザックが直接にであれ間接にであれ生涯を通じて知り得たウロンスキの知的活動分野を網羅・分類しているであろう。二度の言及に共通しているのは、「数学者」と同時に「神秘思想家」^{イリュミナチオン}「リュミネ」のレッテルである。バルザックはウロンスキの生涯同様の知的活動にも決して精通していたとはいえないが、ウロンスキを神秘思想家として評価することが誤った観念でないことは、すでに見た通りである。これに反して、バルザックはウロンスキを化学者とは一度も形容していない。仮に、バルダンスベルジェが注意を喚起しているように、化学もウロンスキの関心のうちにあつて、原子の概念を予告するような著作があつたとしても、³⁷⁾バルザックはそれを知らなかったと

考えるより他ないであろう。いずれにせよ、バルザックが常に神秘思想家と見なし、また実際それにふさわしい側面乃至は本質をもつていて、しかも化学者であるとは一度も述べていない人物の影響によって、果たして神秘主義的「絶対」の探求が化学的「絶対」のそれになつた、と考えられるであろうか？

もっともこの仮説には、今日ではきわめて明らかな弱点があつて、右のような単純な疑問を無用に行っているように思われる。それは執筆経過との矛盾である。バルザックがハンスカ夫人に予告しているように実際にウロンスキに会つたかどうか、そのこと自体なお微妙な問題であると思われるが、実現したとすれば八月上旬から中旬までのことと推測するのが常識的であろう。ところが、バルザックは七月一日付の同夫人宛の手紙で、「私は一人のポーランド人をド・ヴィエジュホヴニャ氏と名付けて、『絶対の探求』に登場させて、まるで子供みたいに楽しみました。そうしたくてむずむずする思いを、どうしても抑えきれなかったのです」³⁸⁾と書き送っている。したがって、ウロンスキとの会見よりも一月以上前のこの時点で、すでにアダム・ド・ヴィエジュホヴニャの「絶対」説が紹介されていたことは明らか

かである。もともと、校正刷との苦闘はこの作品の場合も例外ではなく、バルザックはそれによってとりわけ化学的な面での加筆訂正を大幅に行なっている。ヴィエジュホヴニヤの「絶対」説もその結果重要な変化を見た部分であるが、草稿の段階から化学的であったことに変わりはない。

『絶対の探求』は、疑問の余地なく、考えられる作者とウロンスキとの会見よりもはるかに早くから、神秘主義ではなく化学を題材にして書き進められていたのである。したがって、バルダンズベルジェの仮説が彼のいわゆる「バルザックとウロンスキとのあらたな出会い」による影響を考えるものである限り、執筆経過との矛盾が決定的な反証になるであろう。ちなみに、バルザックは同年八月十一日付ハンスカ夫人宛の手紙で、「私は今クラス夫人の死の場面まで来しました³⁹」と述べて、ウロンスキとの会談がもたれたであろうと思われる頃には、『絶対の探求』の草稿全七章中の三章、全百七十八枚中の百枚をすでに書き終えていたことを明かしている。

(本論三末)

【註】

- (1) La Recherche de l'Absolu, Œuvres complètes de H. de Balzac, éd. Conard, t. XXVIII, p. 185.
- (2) 拙稿「バルザック『絶対の探求』の起源をめぐって」(成城文芸第70号所収)の四頁を参照。
- (3) 同右拙稿の二〜三頁を参照。
- (4) Fernand Baldensperger: Orientations étrangères chez H. de Balzac, Champion, 1927, p. 244.
- (5) *Ibid.*, p. 248.
- (6) Maurice Bardeche: Une Lecture de Balzac, les Sept Couleurs, 1964, pp. 80-82.
- (7) Madeleine Fargeaud: Balzac et La Recherche de l'Absolu, Hachette, 1968, p. 77.
- (8) F. Baldensperger: *op. cit.*, pp. 237-238 を参照。
- (9) *Ibid.*, p. 242 を参照。
- (10) 前掲拙稿の10頁を参照。
- (11) Balzac: Lettres à Madame Hanska, éd. Roger Pierrot, les Éditions du Delta, t. 1, pp. 237-238.
- (12) M. Bardeche: Notice sur La Recherche de l'Absolu, Œuvres complètes d'Honoré de Balzac, nouvelle éd. Société des Études balzacienes, Club de l'Honnête

homme, t. 15, p. 103.

(31) 前掲拙稿の一二頁を参照。

(41) M. Bardèche: Notice sur La Recherche de l'Absolu, nouvelle éd. cit., t. 15, p. 102. 又 Georges Thouvenin: «La Genèse d'un roman de Balzac: La Recherche de l'Absolu» 1971年に發表せられた。

(51) F. Baldensperger: *op. cit.*, p. 244n.

(9) *Ibid.*, p. 245.

(71) Henri Evans: Louis Lambert et la philosophie de Balzac, José Corti, 1951, p. 237.

(81) Auguste Viatte: Les sources occultes du Romanisme, Champion, 1965, t. II, p. 253 et p. 256. 王政復古時代の初期、純粋な神秘神学は科学的であるが政治的なそれに席を譲らざるを得なかった。ウロンスキはまず科学的な神秘思想を代表するものとして位置付けられている。

(91) Introduction au Sphinx, Paris, 1818, p. 16. 又 A. Viatte: *op. cit.*, p. 256 の引用による。

(20) F. Baldensperger: *op. cit.*, p. 244n.

(13) Arson: Appel à l'Humanité, contenant l'exposé de la conduite du nommé Arson, depuis qu'il s'est voué au service de ses semblables, Paris, A. Belin, juin 1818

のなかで述べられていることである。

(22) この文面は Robert Amadou: «Balzac et Saint-Martin», L'Année balzacienne 1965, Garnier, p. 44 の引用による。

(23) この文面は A. Viatte: *op. cit.*, p. 260 の引用による。

(24) 一般に le capitaine Bernard と断言されたものではない。

(53) A. Viatte: *op. cit.*, p. 260 を参照。

(26) *Ibid.*, p. 261 を参照。

(27) *Ibid.*, p. 260.

(83) Sophie de Korwin-Piotrowska: Balzac et le monde slave, Madame Hanska et l'œuvre balzacienne, Champion, 1933, p. 266n.

(93) F. Baldensperger: *op. cit.*, p. 245n.

(33) A. Viatte: *op. cit.*, p. 254. ウロンスキはカントが理性に限界を設けて、神、靈魂、超感性界を信仰の対象としたことを先驗的観念論の超克すべき弱点と観じた点で、ヤコビー、シヤルンゴ、ラインホルト、フイヒテ、シヨリングと通じる立場にあるといわれる。ウロンスキによれば「前絶対の哲学」はシヨリングと共に頂点に達したのであつて、

彼は理性そのものの即實在の認識にいたっていると、その同一哲学を評価している。しかし實在は絶対にあらず、理性は絶対を発見する能力にすぎず、絶対そのものではないという。ウロンスキはその「絶対」すなわち實在の「まったく純理的な原理」を発見したというのである。

(31) A. Viatte: *Ibid.*, p. 254 et suiv. ウロンスキによれば、人類はすでに官能（オリエント）、道徳（ギリシヤ・ローマ）、宗教（中世）、知性（宗教改革以降）の各時代を通じて来た。そして今や第五のきわめて危機的な時期にあるが、それは「人類を相対的乃至形而下の時代から絶対的乃至形而上の時代へ進ませるべき過渡時代を成す」もので、「最古の神聖な啓示に従って、人類が復権の名の下に待ち望んでいるのも、まさしくこの過渡なのである」という。ウロンスキは「絶対」の発見によって諸国民をよりよく統治できると信じて、イリュミニズムの希望であったアレクサンドル皇帝にも訴えているが、彼が夢見たのは「あらゆる国家のすぐれた人間たち、とりわけセヘリヤンの末裔たちによる神政政治」である。ところが「神秘主義の徒党は、今日の人類がその運命を次々に成就することを故意に妨げようとする悪魔的な目的をもっている」のであった。拙論の前稿で、アルソンがウロンスキの支配の瀆神性を訴えたことを述べたが、ウロンスキにとって

アルソンはこのような「悪魔のイデーの地上的具現」であった。

(32) Léon Cellier : *Fabre d'Olivet. Contribution à l'étude des aspects religieux du romantisme*, Nizet, 1953, p. 363. <>内は、ウヤヤットの指摘（A. Viatte: *op. cit.*, p. 256）の引用である。

(33) L'Envers de l'histoire contemporaine, éd. Conard, t. XX, p. 427.

(34) H. Evans: *op. cit.*, p. 287.

(35) A. Viatte: *op. cit.*, p. 261 を参照。

(36) F. Baldensperger: *op. cit.*, pp. 243-244.

(37) *Ibid.*, p. 239 et p. 244 を参照。

(38) Balzac: *Lettres à Madame Hanska*, éd. cit., t. 1, p. 227.

(39) *Ibid.*, t. 1, p. 242.